



↑左から佐藤重彦さん、菅原義孝さん、齋藤幸介さん、長谷川重治郎部会長、阿部司さん、五十嵐功さん。

恵みの宝庫、山形県酒田市JAそでうら

耐暑耐病性にすぐれた

「レノンウエーブ」が好評

7月から高品質赤肉メロンが出荷可能に (編集部)

産地の取り組み

課題

需要期の7~8月は猛暑期になり作付け低下。

現在の取り組み

耐暑耐病性にすぐれた赤肉メロン「レノンウエーブ」を導入。秀品率の高さにも満足。

目標

「レノンウエーブ」の導入で、メロン産地として袖浦を維持発展させていく。

屈指のメロン産地

長らく続いた景気の低迷と栽培しやすい品種の普及で高級感のあつた緑肉メロンは大衆化の道が進み、出荷時期も前進拡大して一般家庭でも初夏から味わえる身近な商品となりました。そうしたなか、産地リレーの後半を担い、7~8月を出荷適期とする当地では、かつて優位販売が見込まれた時代から転換を図り、品質のよい赤肉メロンを出荷することで需要の喚起を図っています。

「庄内米」ブランドの米どころとして知られる酒田市。河村瑞賢による西廻り航路整備以降、羽州屈指の港町として発展しました。秀峰「烏海山」の清冽な湧水や日本海に流れ込む最上川が河口に広がる大地に豊潤な恵みを与えています。海岸沿いに広がる砂丘地帯は、メロンやイチゴを始めとした園芸品目の栽培が盛んです。1920年代には露地メロン栽培がスタートしましたが、

メロン

山形県
JAそでうら



1960年代に浅層地下水を利用した灌漑設備が整うと、メロン園芸地帯として躍進を遂げました。1978年には主力品種となる緑肉メロンのアンデスが導入され出荷も拡大。1983年には新選果場が完成、1992年には50万ケースの出荷が達成されました。砂丘地帯に庄内空港が開港したものの時期でした。

赤肉メロンの役割

当地での緑肉メロン出荷の適期は7~8月となります。メロンの産地間リレーは4月後半の熊本から始まり茨城の5~6月とつながっていきませんが、需要時期が前進化する傾向の中、7~8月の栽培は夏の猛暑続きもあって年々困難になり、緑肉メロンの作付けは減少してきました。かわりに登場してきたのが赤肉メロンで7月中旬~8月上旬は赤肉の出荷が中心となっていました。赤肉メロンは比較的高温に強く、また価格も安定したことで、袖





↑ 部会役員による検品。



↑ 選果作業中の「レノンウエーブ」。



↑ 糖度をはかる長谷川部会長。



↑ 齋藤幸介さんの砂地圃場のハウスで生育中の「レノンウエーブ」。



← 前列、長谷川部会長を扶んで左が販売担当の庄子チーフ、右が渡邊タキイ育種担当。



↑ 選果場に「レノンウエーブ」を出荷した佐藤実さん。



↑ 収穫したレノンウエーブを手に齋藤幸介さん。

浦で面積を増やし緑肉との割合は50…
50の作付けにまでなりました。

「レノンウエーブ」で前進化

赤肉メロンの栽培が始まると市場からは緑肉メロンとセットの需要が見込まれ、早い時期からの出荷要望が高まっていきました。産地でも赤肉メロンの前進出荷を目指すものの、従来の赤肉品種では、7月1日の時点では小玉で、緑肉の「パンナ」等と大きさがそろいません。

「一番問題なのが陥没病に悩まされることです。陥没病は、出荷後に果実に陥没した病斑となって発生するので、収穫時は気付かず出荷後のクレームになります」

長谷川重治郎J Aそでうらメロン部会部会長も毎年数コンテナを処分するほどで、困っていたそうです。

「試作の時点でほかの品種とくらべ『レノンウエーブ』は陥没果の発生が少なく安定していました。加えてえそ斑^{ぼん}の耐病性ももっているので作付けを判断しました」

今年からJ Aそでうらの推奨品種となった大きな理由を話していただきました。長谷川部会長や5名の部会役員が試作をして協議を重ね「レノンウエーブ」を正式導入。出荷ケースやシールも発注されました。

期待される特長

部会役員の一人である若手生産者の齋藤幸介さんのハウスに場所を移して、部会役員の皆さんに「レノンウエーブ」の特長を改めてお伺いしました。齋藤さんは、「同じ時期の赤肉メロンと比べて玉伸びがいい。秀品率が高くネットの出方も同じにそろいます」と、ハウスを見せてくださいました。「自根栽培なのでえそ斑点耐病性があるのはありがたいし、いい品種が出てくれたと思っています」

阿部司さんや五十嵐功さんにも従来品種より前半の肥大がよいと認めていただきました。

「ネットが入った後に温度をかけても後半まで肥大してくれます」という五十嵐さんは誰でも作りやすい品種だと評価しています。

「従来の赤肉よりも母がこの品種が作りやすいと言いました」

佐藤重彦さんは「秀品率が高いので個別選果が楽です。複数のハウスのものを一気に出荷できる」と喜ぶ反面、ここ2〜3年天候がよく大玉傾向だったため、今年は肥料を抑え気味にしたため、今年は低温で小玉傾向に。

部会役員の菅原義孝さんは、「つる伸びがよく日陰ができるのでマルチがかかっていないところでも根がやけずに

生育が強い」とベテランらしい目線を向けていました。「箱数も出るし、何より皮際まで肉厚なレノンシリーズはギフト用途で喜ばれるから、導入は増えると思う」と話していただきました。さらにはこの日、集荷場に「レノンウエーブ」を出荷された伊藤徹雄さんなど、技術の高いベテラン生産者が「レノンウエーブ」に切り替えたことで部会全体でも評価が高まっているとのことでした。

これからの袖浦

J Aそでうらメロン部会は、現在123名が所属しています。夏の照り付ける日差しの下、元気に明るく話していただいた長谷川部会長や他の部会役員のみなさん。差し入れの飲み物を届けていただいた営農販売部の太田明日香さんも加わって、産地の様子を聞かせていただくなかで、決して楽観的なことばかりではないものの、袖浦のメロン産地を維持発展させていきたいというあふれる熱意が感じられました。夏の日差しのもと順調な生育を見せる「レノンウエーブ」が産地の発展に貢献することを願っています。

